

第三百八十一回 青葉会

平成三十年正月五日（金）初芝居総見：新橋演舞場・昼の部（十八名参加）  
一月二十五日（木）初句会：文京区民センター午後五時半〜九時

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか

〈投句〉

中野一灯 山内天牛 伊賀山そらお 小早健介 在間千恵 朱牟田恵洲 土谷堂哉 星田啓子 古田昇

〈紙上選句〉

山崎亜也 山田けい子 赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 後藤保明 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明

M・S氏 村田くに子

《互選句》

八点

◎ 初旅の母百歳の寝息かな

堂哉（忠・孤・彦・五・保・弘・敏・允）

七点

◎ 積み残す夢もありけり宝船

盛雄（紀・孤・彦・五・弘・ゆ・正）

五点

◎ 呼び覚ます春の鼓動やビバルデイ

健介（紀・孤・龍・敏・灯）

四点

◎ 海老蔵の見得にしびれつ初歌舞伎

ゆたか（孤・灯・允・正・天）

首筋の冷えや最上川（もがみ）の炬燵舟

孤舟（紀・灯・く・天）

北斎の濤（なみ）とも雪の親不知

全（堅・弘・灯・允）

◎ 空一枚海一枚の初明り

全（眞・五・弘・允）

◎ 海老蔵の睨みいたたく五日かな

五郎太（紀・孤・保・敏）

三点

◎ 受験生みくじひく手の震えかな

啓子（猛・彦・龍・灯）

子等くれし億円札のお年玉

そらお（紀・龍・天）

寒気飛ぶ赤煉瓦街に熱きジャズ

紀久男（保・龍・M）

山の端へ逃げ足迅き冬日かな

孤舟（猛・五・ゆ）

◎ 初吟の息の揃ふや想夫恋

弘子（孤・五・く）

◎ 駅伝の道の一軒白飾り（小田原）

全（紀・彦・く）

◎ ありがたきひととせ初湯溢れけり

ゆたか（孤・保・龍）

鐘の音や並ぶ笑顔に年明けり

全（忠・敏・く）

◎ 初茜さす常念岳（じょうねつ）へ深呼吸

一灯（堅・弘・ゆ）

海外の子に年玉の為替組む

昇（眞・紀・く）

◎ 天を突き刺し雲払ふ冬木立

啓子（堅・紀・M）

◎ 懐（こころ）え性年々失せて賀状書く

天牛（紀・忠・孤）

◎ 独楽廻し教への爺さん株を上げ

全（猛・正・M）

◎ 大寒に生まれて我は仁王立ち

けい子（紀・忠・孤）

◎ 庭先の冬百舌鳥一羽けたたまし

そらお（ゆ・M）

◎ 初芝居心技頭（しんぎつ）抜けし吉右衛門

紀久男（彦・敏）

房総の山低きかな寒の風

弘子（五・ゆ）

まづは火を振る舞ひ浜のどんど焼

全（灯・天）

◎ 今回で賀状仕舞ふと記す友

千恵（眞・敏）

雪を乗せ一層枝ぶり美しき

全（猛・紀）

◎ 淑気まず成田屋寄り目の睨みより

恵洲（眞・紀）

◎ 鶯の幼き初音あさばらけ

ゆたか（堅・M）

◎ 地吹雪の礫頬打つ峠越え

一灯（允・く）

◎ 眼の強き少年剣士冴へ返る

けい子（保・允）

◎ 書き初めは孫子の名書く箸袋

天牛（龍・ゆ）

◎ スキー靴親子三足並べ干す

全（忠・正）

◎ 初風呂や細るししむら叱咤せむ

盛雄（紀・猛）

二点

一点

老妻とあれこれ偲ぶ寒見舞  
身と足とゆつたり伸ばす暮の風呂  
結露拭く妻の指先冬の景  
小春日や夫婦で分け合ふ串団子  
新年の挨拶のはず長電話  
冬晴れや弓の錬士に次女合格  
寒菊や心引き締め癌検査  
座持ちよき女将を横に新年会  
読み上げて一人札取る歌かるた  
初雪や英日句集届きたり  
じゃんけんで鬼決める声日脚伸ぶ  
冬の陽の紫雲纏ひて落ちにけり  
賀状来ぬ友に電話で安否問ひ  
ふるさとの海冷え凝(こ)る助宗鱈  
武蔵野の空掃く高枝(たかえ)北風(きた)の音  
月ピカリ山茶花ましろに浮く如し  
冬座敷暖は古雅なるスケルトン  
寒の夜海風を聞くジャズに酔ふ  
雪掻きしつ朝刊とりに行く  
◎ 紐育発新たなうねり大発会

紀久男 (忠)  
猛 (堅)  
全 (弘)  
忠彦 (眞)  
全 (彦)  
全 (く)  
全 (紀)  
孤舟 (正)  
五郎太 (天)  
全 (正)  
恵洲 (天)  
堂哉 (猛)  
ゆたか (M)  
一灯 (弘)  
全 ( )  
啓子 (紀)  
亜也 (紀)  
けい子 (紀)  
天牛 (孤)  
盛雄 (紀)

● 次回青葉会

二月二十二日 (木) 午後五時半～八時半 文京区民センター  
当季雑詠各自五句 投句は二句  
三月二十二日 (木) 全

以上 文責 紀久男

平成三十年一月 初句会報

一 今回は天牛さんから9名主席。投句10名。忠彦さん別注の海苔巻きと唐揚げ。天牛さんよりいつもの美々卯の凍結酒、一灯さんの大吟醸（名古屋の神の井酒造）、忠彦さんの純吟「真澄」（信州）、小生の吟醸「琵琶の長寿」（滋賀・今津の池本酒造）と缶ビール、つまみに舌鼓打ちつつ、一灯さん持参の「伊吹嶺」1月号（創刊20周年記念号）や盛雄さんの毎日新聞兵庫文芸・若林京子選に5週連続入選（内一句は特選）切抜きコピーを回覧し乍ら開始。  
猛さんの披講で御覧のように堂哉さん、盛雄さん、健介さん、ゆたかさんの4名と孤舟選者好成绩でした。

話題（一）この冬の厳しい寒さと雪対策で来冬は昼間に句会を催すことにする方針（二）盛雄さん健介さん御指導の「きさらぎ句会」の句会と新年会に小生が招待に与ったこと報告。（伊丹の長寿蔵）（三）二年後の東京オリムピックと竹橋ビルの竣工に続いて当会も400回の節目を迎えること  
：記念（企画）として合同句集の上梓など皆様のアイデアを募りたい等々。  
句会は早目に済ませ久しぶり吉例の第二部はゆたかさん猛さんの朗々たる詩吟と小生の三津五郎声色二番で〆と致しました。

二 関係者近況

天心の雲から広場へ紅葉降り	万里子	われに似た影連れ歩く文化の日	丹野敦雄
快晴や厚志走りの大王菊	全	——「俳句」2月号	对馬康子選
遅しき七株立ての菊花展	全	初山河吾に春秋の日々残る	盛雄
黄葉の銀杏並木を聴講へ	全	煩惱の浮き沈みする冬至風呂	全
華やかに世界の薔薇が蒐められ	全	羅針盤なき小船の漁や冬怒涛	全
長閑けしや師友と小鳥の歌を聴き	全	群ごとに軍師いるらし鴨の陣	健介
かはゆくて小薔薇へひたと屈み込み	全	歳一つ取り去る気概初稽古	全
札のしわ伸ばし献金石露の花	眞希子	年の瀬や人みな群いてみな孤独	全
牧師館小春日へ開け赴任待つ	全	地唄舞ふ紅唇きゆつと初稽古	紀久男
何をもて量らるる信冬堇	全	初風呂や妻の鼻歌洩れ聴こゆ	全
冬空へ介護の奮起と深呼吸	全	爛呷り人心地つく通夜帰り	全
這這の児の手逃るる枯蠅螂	弘子	——きさらぎ句会12月・1月	
秩父路や百円に買ふ柚子三個	全	アルバムに剥がした跡や雪催ひ	正明
行く影と見えしが来る十三夜	全	雪の朝街の噂も掻き寄せる	全
月影の届かぬ井戸辺一葉忌	全	聞きたきや友の「声色」赤海鼠	全
果てもなく飛ぶ草の絮羨しとも	青史	初松籟城址の空を渡りけり	允章
初霜やもう想定外は何も無い	全	観音の日を満面の淑気かな	全
冬の虹消ゆる一瞬クオ・ヴァデイス	全	日溜りやひとかたまりの冬堇	全
箸置の一つにて足る膳寒し	全	落葉踏み即興の曲奏でけり	昇
喜寿吟行師に躓きゆきて秋日浴ぶ	紀久男	我もまたまた泰平の世の浮寝鳥	全
舞台はね楽屋に配る瓢酒	全	ストープのブルーフレーム飽かず見し	亜也
紫苑咲く原発浜の落暉かな	全		

——「森の座」2月号

三「伊吹嶺」1月号（創刊20周年記念号）一灯さんの「みちのく」より小生好み11句抄出

海猫帰る蝦夷へ遠目の寒立馬	茜さす津軽富士越え白鳥来
千鳥鳴く岬の端の海難碑	丈低き晩稻荒き風に耐ふ
海鳴りの津軽海峡月欠くる	鳥渡る太宰仮寓の浦に泊つ
紅玉をかぶりつき日よ友遠く	暮れ泥む行合岬千鳥鳴く
熊打ちのカタギと酌めり濁り酒	白神や山の音吸う樺林
	耳つけて樺の巨木に秋を聞く

平成三十年年二月十五日

紀久男記